

国際線定期貨物便が堅調推移

■26年冬季計画、成田空港は過去最高

2026年冬季スケジュール(26年10月25日～27年3月27日)の日本発着・国際線定期貨物便は、堅調な運航計画が示されている。成田国際空港会社によると、成田空港の国際線定期貨物便は開港以来、過去最高の計画だ。関西空港、中部空港も25年冬季スケジュールを上回る運航計画となっている。貨物便は旅客便に比べて、計画と実際の運航実績に開きがある場合も多いが、AI関連、半導体製造装置やその関連貨物、eコマース(EC)などの需要が運航計画を底上げしている。



成田空港は国際貨物便が過去最高の運航計画となる
(写真提供=成田国際空港会社)

26年冬季スケジュール計画の集計対象期間・方法は、成田空港が11月1～14日(着・発それぞれ1回)、関西空港は冬季スケジュールを通した週平均(便数ベース=着・発で1便)、中部空港は期初計画(11月1日時点、便数ベース=着・発で1便)としている。前年同季比増減に関しては、成田空港は25年冬季計画との比較、関西空港と中部空港は実績との比較となっている。

成田空港の26年冬季計画における国際線定期貨物便計画は週669回で7%増となった。貨物便運航会社は24社で、そのうち貨物便のみの運航会社は17社。カリッタ航空やアトラス航空の運航計画の増加が目立つ。引き続き堅調なアジア・北米線

とともに、日本発着を含むアジア域内を含めて、半導体製造装置・関連貨物、EC需要が堅調に推移することを想定した計画になったとみられる。

旅客便を含む国際・国内を合わせた週間総発着回数は4%増の週4945回で開港以来の最高値だ。国際線定期旅客便は中国線の減少があるものの、韓国や台湾、香港を含むアジア・中東路線、欧州線が好調に推移する。貨物便、旅客便を合わせた国際線定期便は6%増の週4051回という計画。国際線全体の計画も開港以来の過去最高となり、初めて4000回を超える。

関西空港の国際線定期貨物便は27%増の週平均199.3便。運航会社数は17社、就航国・地域は22、就航都市数は43という計画だ。EC需要

や半導体関連需要が運航計画を押し上げている。国際線定期旅客便は1.9%減の週平均1226.8便。中国路線の減少の影響を受けているが、韓国や東南アジアをはじめ、中国路線以外の路線は極めて好調だ。中国路線を除くと7%増という計画となる。27年2月にはエアインディアが関西―德里線の旅客便を毎日運航で開設する。エアインディアは19年まで香港経由で関西空港に運航していたが、今回は直行便としての就航となる。

中部空港の国際線定期貨物便は8%増の週42便。貨物便運航会社は、ポーラーエアカーゴ、カリッタ航空、DHLエア、エアホンコン、日本航空、シンガポール航空、チャイナエアライン。